



第8229号

2025年1月8日(水)

## 「地震予知」が消えた日

防災システム研究所 所長 山村 武彦

### ◆間に合わない防災会議

30年前の1995年1月17日、私は地域安全学会主催の「第4回日米都市防災会議」に出席するため大阪に宿泊していた。会議の主要テーマは米国で起きた地震の総括だった。

前年1月17日に発生したロサンゼルス・ノースリッジ地震(M6.7)である。サンタモニカの国道10号線が崩壊するなど死者57人を出した震災だ。まさかその1年後の同じ早朝に阪神淡路大震災が起きるとは、日米の防災関係者でさえ青天のへきれきだった。

関西の防災意識啓発を願う市民参加の全体会議もあり、市中に張られたポスターのサブタイトルは「来るべき大地震に備えて」だった。この会議のことは後日新聞で「間に合わない防災会議」と書かれ、当時のじくじたる思いを今も忘れていない。

### ◆神戸の震度は？

この日ホテルの8階にいた私は突き上げる揺れで目を覚ました。一瞬「東海地震！」かと思ったが、激しい揺れは十数秒で収まったことから内陸地震と判断。停電の中、手探りでバッグに入れていた懐中電灯とラジオを取り出した。

数分後、NHKは「午前5時46分ごろ近畿地方で強い地震」「震源は淡路島北端部。京都・彦根で震度5、大阪・奈良・和歌山・岡山など広い地域で震度4」「この地震による津波の心配はありません」などと伝えた。

その時、強い違和感を覚えた。震源近くには神戸海洋気象台(現神戸地方気象台)がある。それなのに神戸の震度が出していない。「発信できないほどの甚大被害かもしれない」と直感し、すぐ神戸に向かうことを決断した。

### ◆改称された「本部長」

タクシーが武庫川橋を渡ると町の様相が激変した。西宮、芦屋、神戸と国道43号線を進むにつれ被害は激甚さを増していく。ビルが崩れ、マンションの窓から激しく噴き出す真っ赤な炎と煙。倒壊住宅が車を押しつぶし、歩道橋や跨線橋が崩壊、高速道路が傾き、まるで戦場だった。

押しつぶされた住宅で救助活動を手伝ったが、あの時ほどチェーンソーやジャッキなどの救助用具が欲しいと思ったことはない。倒壊した柱や梁(はり)を動かそうとロープを掛け、車で引っ張るがびくともしない。役立ったのは、のこぎりや鉄パイプだった。兵庫県監察医の集計では、亡くなった人の92%は地震後14分以内に死亡していたという。

たった十数秒の揺れで、死者6434人、全壊家屋約10万5000棟、半壊家屋約14万4000棟という甚大な被害をもたらした大震災だった。

しかし、政府が発表していた六甲・淡路島断層帯地震の30年以内の発生確率は、0.02~8%だった。こうした的中率の低い長期予測はできても、どんな規模の地震がいつ、どこで発生するか、警報レベルの直前予知はできない。

この地震後、旧科学技術庁内にあった「地震予知推進本部」はその本部長から「予知」が消され、「地震調査研究推進本部」に改称された。1月17日は地震予知が消えた日でもある。

(やまむら・たけひこ)

◆監修◆ 内外情勢調査会

◆委託編集◆ 時事総合研究所

〒104-8178 東京都中央区銀座5-15-8 TEL: 03-6800-1111(代表)

この記事に関する問い合わせは、時事総研(03-3546-2384)まで

本稿の一切の情報について、無断転載・複写をお断りします。©時事通信社 2003